

論文

ガーナ都市部における「シュガー・ダディ」との交際関係

——動機をめぐる視座の再考——

小 田 英 里*

1. はじめに

サハラ以南アフリカ諸国（以下、アフリカ諸国）において、「シュガー・ダディ」として知られる年配男性と若年女性との交際関係を主題とした研究の主流は、保健医療分野の研究である（Amo-Adjei, et al., 2014; Luke, 2005; Maganja et al., 2007）。従来の研究は、性感染症予防等のリプロダクティブ・ヘルス／ライツや青少年教育に関する議論の中で、あるいは女性の脆弱性の原因のひとつとしてシュガー・ダディとの交際関係を問題視してきた。それゆえ、従来の研究の大半は、女性たちへのインデプス・インタビューやフォーカス・グループ・ディスカッションを通じて彼女たちの動機を探り、この交際関係が広く展開する文化的要因やグローバル化・近代化の影響を特定し、同交際関係が引き起こす問題に提言をおこなうことを目的としている。そして、2章で詳述するように、交際を推進する要因として、「生存の必要性」や「消費欲求の充足」等を析出する過程で、それぞれの要因に沿った特定の「アフリカ女性像」を提示してきた。しかし、実際に彼女たちがどのように交際しているかを論じた研究はなく、それゆえ様々な要因や動機が現実の交際関係にいかに関与しているかは詳細に描かれていない。

本稿は、同交際関係が結び結ばれる原因や動機に焦点をあてて議論してきた保健医療分野を主流とする従来の研究に対して、どのように人類学的視座から同交際関係をめぐる議論を新しく展開できるのかを、ガーナ女性によるシュガー・ダディとの交際関係の事例をもとに論じることを目的としている。

現地調査に基づいた事例を紹介する前に、以下ではまず、シュガー・ダディと若年女性との交際関係を対象とした先行研究の議論を整理し、本稿の問題意識を明確にしたい。

2. シュガー・ダディとの交際をめぐる先行研究

2.1. シュガー・ダディとなる男性

「シュガー・ダディ」という用語は、アフリカ諸国でごく日常的に使用されており、本稿の調査地ガーナでは、互換的に用いられる「スポンサー」と並んで広く知られている（Dinan, 1983; Kuate-Defo, 2004）。ケニア西部の都市キスムを事例にHIV/AIDS 拡散とシュガー・ダディ関係との相関関係の有無を定量的に検証したルークは、「シュガー・ダディ」について、基準となるステレオタイプはないと指摘しながらも、採用されてきた用語の説明を統括し、シュガー・ダディを、「若い女性からの性的恩恵と多額の金銭・贈り物を交換する大人の男性」とあるとする（Luke, 2005: 6）。また、シュガー・ダディ関係における男女の年齢差は10歳以上であるとし、世代間を越えた異性関係・性行為であること、経済的支援が可能な裕福な男性であることを指摘する（Luke, 2005）。さらに、金銭的豊かさだけでなく、男性の特権的地位や決定権が女性との性行為の見返りになるケースもある。例えば、マガンジャらは、

キーワード：ガーナ、シュガー・ダディ、女性、都市、贈与交換

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2015年度入学 共生領域
日本学術振興会特別研究員(DC2)

タンザニアの首都ダルエスサラームを対象とした性感染予防を目的とした調査で、シュガー・ダディの特徴を次のように説明する (Maganja et al., 2007)。

これらの年配男性はしばしば (常ではないが)、若い女性に権力を行使できる立場にある。例えば、学校で性行為と良い成績を交換する男性教師、セックスの見返りに融資へのアクセスを提供する銀行員、公的な地位を活用する政府の役人など (Maganja et al., 2007: 975)。

以上に示されるように、従来の研究には、シュガー・ダディとは「性行為」の見返りに金品や特定の便宜を提供する、豊かな／特定の権威・地位をもつ男性であるという共通の認識が存在する。実際に、「シュガー・ダディ」との交際に代表される、金品との交換によって成立する性行為は、「トランザクショナル・セックス」(以下、TS)と呼ばれ、議論されてきた。次に、アフリカ諸国のTSをめぐる議論を紹介しながら、同関係がどのようなものであると論じられてきたかを整理する。

2.2. トランザクショナル・セックス (TS) と売春との違い

TSを目的とする交際関係の存在は、数多くのアフリカ諸国で報告されている。例えば、タンザニアでは14歳から19歳の女性の80%、ウガンダでは15歳から19歳の女性の90%がTSに従事しているという (Maganja et al., 2007: 975)。極めて多くの若年女性が従事している性交渉めぐり、多くの先行研究は、アフリカ諸国におけるTSは、少なくとも当事者にとっては売春とは異なるもの、あるいは完全に一致しないものであるという認識を示している (Luke, 2005; Poulin, 2007; Wamoyi et al., 2011; Zembe et al., 2013)。先行研究は、金品との交換によって成立する性交渉には性感染症や望まない妊娠等の危険性があることを問題視しながらも、TSを一義的に女性の搾取であるとみなす考え方は西欧近代的な売春観に根ざしており、アフリカ諸国の一般的な価値観と照らすと必ずしも適切ではないと議論する (Poulin, 2007; Wamoyi et al., 2011; Zembe et al., 2013)。

実際に、その大半は、アフリカ諸国におけるTSを定義することには困難性が伴うことを認める (Shefer, 2012)。その理由の一つとして、現在でも広くみられる一夫多妻制度は、男女の年齢差を利用して成立している慣行であり、アフリカ諸国では、婚姻関係や恋愛関係において男性が年上の場合、「年齢差」はほとんど問題にならないからである。また、多くのアフリカ諸国と欧米の黒人コミュニティでは、性交渉をもつ者のあいだで贈り物や金銭を交換する行為が、交際における規範／文化となっている (Ankomah, 1998; Zembe et al., 2013)。例えば、アンコマは、ガーナの都市ケープコーストの独身女性の事例から、大半の婚前交渉は食事や衣類などの物質的な交換によって成立していると述べる (Ankomah, 1998)。

また、先行研究は、アフリカ諸国におけるTSと売春との違いを、以下のように論じる。第一に、TSは、結婚へと至る可能性がある恋愛関係と、実利的な性行為と金品との交換関係の連続線上に位置することである。売春が身体を売る相手を選ぶ行為であるのに対して、TSは恋人になりうる相手を探す中で偶発的に生じる行為である (Hunter, 2002; Wamoyi et al., 2011)。第二に、大抵の場合、道徳的に売春が否定されるのに対して、TSは道徳的に容認／推奨された行為である。例えば、ワモニらは、彼女たちの両親に対する調査を通じて、社会的に継承されていく価値観に光を当てている (Wamoyi et al., 2011)。ワモニらが調査した女性たちの父親の大半は、性行為の見返りに金品を贈与されるのは「女性の権利」であると主張した (Wamoyi et al., 2011)。ある父親は、女性のヴァギナを「店で売られている肉」に例え、「商品」である以上、男性らが金品を与えずに性行為をする (ヴァギナ／肉を得る) ことは「強盗」に等しいと述べている (Wamoyi et al., 2011: 8-9)。また、女性たちの母親は、金品との交換なしに身体を許す女性は自尊心を欠いており、「手に入れ易さ」という意味で「売春婦」と同等であると主張した。彼女たちは、「最終的に、彼女たちの身体 (ショップ) から奪うこと (テイクアウト) ができないヴァギナ (セックス) のために金品を貢ぐ男性たちを拒絶することは、男性に対するコントロールや、女性は男性よりも賢いという感情を自ら否定する愚かな行為である」と語った (Wamoyi et al., 2011: 9-11)。

このような価値観は、婚資をめぐる慣行とも関わっている。南アフリカ都市部を事例に、ゼンベらは婚資制度の崩壊とTSの関係を結びつける (Zembe et al., 2013)。かつて婚資 (ロボロ) のために節約し、家を建設し、子ども

をもうけて自身の血統を維持する能力から男性的成功のイメージを構築していた男性は、経済的貧困が原因で婚資を通じた正式な結婚ができなくなり、男性的成功を表現する別の方法として、複数の性的パートナーとの交際という新たな方法を見つけたという (Zembe et al., 2013: 11)。しかし、夫が妻方親族に支払う婚資とは違い、TS では取引する女性自身に支払われる (Wamoyi et al., 2011: 12)。ワモニら (2011) は、TS が続く理由のひとつとして、「セクシャリティを利用する女性の自律感、女性が対面する男性に対して力をもつと感じられる貴重な機会のひとつであり、女性として生まれた価値に対する感覚と誇り、性的関係性における力関係の平準化といったものが含まれるだろう」(Wamoyi et al., 2011: 13) と指摘し、女性のエンパワメントや性感染症予防のための戦略は、このような動機を考慮すべきであると論じた。次項では、より直接的に「動機」に焦点をあてた議論を整理する。

2.3. 交際の動機——サバイバル・セックスとコンサンプション・セックス

先行研究は、金品と性行為の交換が男女の交際関係には伴うべきであるという「文化的」な価値観が遍在し、西欧近代的な価値観という売春と異なるとしながらも、TS はグローバル化や近代化と密接に関連した慣行であることを指摘する (Amo-Adjei et al., 2014; Hunter, 2002)。TS の交際へと駆り立てられる動機として指摘されてきたのは、男性に比べて不利な環境で経済活動をする女性の「貧困」である。例えば、アンコマは売春婦だけでなく、学費の捻出が困難な学生から低い給与水準で働くオフィスワーカーに至るまで、様々な女性たちが TS の動機を貧困と結びつけて語ることを提示している (Ankomah, 1998)。他方で、こうした見方を批判する研究もある。例えば、アモ・アデジェイらは、アフリカ女性が TS に従事する動機は、ハイクラスな女性であることを表現するための衣服やヘアスタイル、ファストフード等に対するモノの消費欲求にあると論じ、女性たちを単なる「犠牲者」として見る視座を批判している (Amo-Adjei et al., 2014)。

上述したゼンベらは、南アフリカ都市部における 16 歳から 24 歳の女性のグループ・ディスカッションを通じて、交際の動機を探った (Zembe et al., 2013)。ゼンベら (2013) は、若い女性がシュガー・ダディと交際する動機を扱った研究を、生存主義の戦略 (サバイバル・セックス) としてみる研究と、消費意欲を満たし、近代化と成功のイメージを追及するための手段 (コンサンプション・セックス) としてみる研究に区別した上で、このパラダイムを批判する (Zembe et al., 2013: 3)。彼らは、若い女性たちは TS を生存ではなく、高価な装飾品などに対する消費ニーズを満たすためにも使うが、コンサンプショナル・セックスは「軽薄」なものではなく、別種のサバイバルのために強いられたものであることを主張する。彼らが調査した女性たちは、特定の友人グループの維持や友人間におけるパワーゲームで生き残るために「彼らのカネを食べる」と語る (Zembe et al., 2013: 7-9)。彼女たちが従事しなければならない「今っばい」ことには、友人とのファッション競争に加えて、シュガー・ダディから得た性交渉のテクニクと金品でつなぎとめる年下 (13, 14 歳) の男性との交際関係がある。さらに、週末のパーティのために「いけにえ」のように身体を売る係が回っていく遊びや SNS コミュニティなどの、グローバル資本主義の浸透を受けて変容していく社会での新しい「文化」が多様に含まれる (Zembe et al., 2013: 9-11)。

2.4. 先行研究の問題点と本稿の問題意識

ここまで整理してきた先行研究の議論からは、以下の二つの主張を読み取ることができる。第一に、シュガー・ダディとの交際関係は、婚姻に至りうる恋人関係と実利的な目的の性交渉の連続体のどこかに位置づくものであり、婚前交渉の性行為に金品の交換が伴うべきとする文化的理解の中で西欧的な売春と区別され、多くの場合、道徳的に認められている。第二に、シュガー・ダディとの交際関係は当該地域の文化的な慣行の上で成り立っているが、女性たちがこれらの関係へと至る動機には、貧窮や物質的な消費欲求、友人間のピアプレッシャーなど近代化・グローバル化の影響が関係する。

これらの先行研究は、性感染症の拡散予防や女性の脆弱性といった問題に対する解決策を探るという共通の問題意識の上で、同交際関係が蔓延する異なる背景や要因に着目している。すなわち、第一の主張は、アフリカには「西欧」とは異なる価値システムがあり、このような交際関係が拡散する背景には、アフリカ独自の文化的慣行や価値観があるという理解であり、第二の主張は、近代化・グローバル化に伴い、アフリカの文化的慣行や価値観が顕在化/変容することで、同交際関係の拡大や発展につながったとする理解である。

しかし、いずれの理解も、アフリカには西欧とは異なる「価値システムの全体」があるという多元主義にもとづく対比を前提にしている点においては、共通している。このような西欧とアフリカの対比は、「文化」をめぐる本質主義批判から「文化を書くこと」をめぐる民族誌記述の問題、存在論的転回以降の人類学の議論に至るまで一貫して批判的に論じられてきた (cf. 浜田, 2018: 99-113)。「なぜアフリカでは、このような交際関係が蔓延するのか」という問いを、非アフリカ人研究者がみずからの文化や価値観との違いや、近代化・グローバル化に伴う西欧の価値基準とアフリカの文化的な価値基準との折衝に注目して論じる視座は、アフリカ女性を西欧の女性とは異なる他者として異化する視点を強調する。だが、アフリカ女性の価値観と非アフリカ諸国の女性のそれとの距離が、アフリカ女性たちのあいだの価値観の違いよりも大きく自明であるという根拠はない。具体的なアフリカ女性がシュガー・ダディとの交際関係へと駆り立てられ、それをその時々文脈に応じて維持・変容させていく細やかな実践の中には、筆者を含む非アフリカ女性による特定の実践と共通した論理が潜んでいる可能性がある。すなわち、同交際関係の社会的意味を問うためには、これまでの研究が暗黙的に措定している「性行為と金品との交換」や「貧困／現代的な消費欲求」等の問いを括弧にいれ、背景や原因を問う視座から、「どのように交際するのか」、「いかにしてシュガー・ダディ／シュガー・ベイビーとなるのか」という実践を問う視座へとシフトする必要がある。

3. 調査地の概要と調査対象

本稿の調査地は、ガーナ共和国の中南部に位置する、アシャンティ州の州都クマシである。クマシはガーナの古都であり、人口規模 173 万人以上 (GSS, 2014: 19) をもつガーナ第二の都市である。アシャンティ州の民族構成は、ガーナの最大民族集団であるアカン系民族のアサンテが人口の 80 パーセント以上を占めるが、商業都市クマシには地方から出稼ぎにきた多様な民族や周辺国からの移民も多数居住する (GSS, 2013a; 2013b)。

クマシを含む南部では、インフォーマル経済に従事する女性の割合が 80 パーセントを超え (GSS, 2013a)、女性の経済活動が盛んである。アサンテを含む母系制の民族集団が大半を占めるガーナ南部の女性たちは、家事労働と経済活動の二重の性役割期待を果すために、女性同士の連帯や相互扶助を駆使していることが論じられてきた (Clark, 1994; cf. 織田, 2011)。他方で、このような研究は、夫や母方親族男性との関係と、商売等を通じて築かれる女性どうしの連帯という男女の対立図式を強調し、彼女たちが夫や親族以外の男性と築く関係についてはその存在を指摘しつつも、十分に注目してこなかった¹。

ガーナでは、シュガー・ダディとの関係は特別に秘匿とされる関係ではないが、法的あるいは社会的に問題になる場合もある。そのため、研究対象をガーナ国内において法律上婚姻可能となる 18 歳以上 (GSS, 2013b: 55) に限定し、「若者の経済活動や社会関係」をテーマに調査協力に対する承諾を得たのち、彼らと慎重にラポールを築くことを試みた。現地調査は、2016 年 3 月、2017 年 9 月から 12 月、2018 年 2 月の計 5 ヶ月間行なった。2017 年は、クマシの S 大学に滞在し、10 人の大学生に対して簡単なアンケート調査を実施した。後日、調査協力への同意を得た学生に加えて、調査の過程で出会った人物にスノーボール方式で紹介された人物のうち、特にパトロンとなる人物から支援を受けている約 20 人のクマシ在住の若者 (「シュガー・ベイビー」²) を中心に、聞き取りや参与観察を実施した。

本稿では、調査した若者たちの中から、交際をめぐる状況をより詳しく観察できた 2 人の女性の交際事例を取り上げる。1 人目のイザベル (24 歳) は、クマシ市内の大学生で、進歩的な友人グループに属する人物である。2 人目のヴィクトリア (26 歳) は、男性との出会いの多い低賃金の職場で働きながら、自活している女性である。第 2 章で整理した先行研究の多くが提示する代表的な「シュガー・ベイビー」像と同様に、ガーナで多くの人から聞いた典型的な「シュガー・ベイビー」は、学費の確保や友人のおしゃれ競争のために年配男性と交際する学生および低収入による経済的な貧困状況を生きぬくためにやむを得ず交際に従事する女性である。その意味では、彼女たちは典型的なシュガー・ベイビー像の両極を示しているが、本稿で詳述するように、実際の交際では、先行研究や一般の人々がイメージする女性像と必ずしも一致しない。

次章では、このような対照的な 2 人の女性による「シュガー・ダディ」との日常的な交際の観察結果を切り出していく。なお、本稿に登場する人物はすべて仮名である。

4. シュガー・ダディと交際する女性たち

4.1. 女子大生イザベルの事例

イザベルは、アサンテ出身のクマシ育ちであり、現在（2017年当時）は幼稚園教諭になるために大学で学んでいる。彼女は高校卒業後20歳で結婚し、夫とイギリスで2年間過ごした後に離婚した。彼女は4歳の娘と3歳になる息子をもつが、子どもたちは実家の母親（子どもたちの祖母）に預け、大学の寮で暮らしている。教員らによると、彼女は成績優秀であり、友人たちの間ではリーダー的存在と目されている。

出会って間もない頃、イザベルに「スポンサーの意味を知ってる？」と尋ねた。彼女は即座に知っていると答え、シュガー・ダディが歌詞に出てくる曲を教えてくれた。彼女は、その曲の中の女性は二人の恋人をもち、若い彼氏は好きな人であり、彼とのセックスは「コンサンプション・セックス」であるのに対し、年上の彼氏はシュガー・ダディであり、彼とのセックスは「サバイバル・セックス」だと説明した（2017年11月15日）。

イザベルは、先行研究が使用する概念をあたりまえのことに口にしたが、彼女の示す「コンサンプション・セックス」は、消費社会論をベースにした先行研究が意味する内容とは異なり、セックス自体が「消費」の対象となるような好きな異性との性行為を指しているようだった。「サバイバル・セックス」は「生き抜くため」というよりも、以下で述べるように消費欲求を満たすことも含めた「金のため」のセックスを意味している。

私はイザベルと教会のチャリティーイベントに出た。イベント終盤になって帰宅する旨をイザベルに伝えると、「ボーイフレンドを紹介するから、少し待っていて」と言われた。実はこの数日前に、イザベルの子どもたちに会いに行った帰り道で、彼女のスマートフォン（以下、スマホ）に電話がかかってきた。この時、イザベルは苛立った様子で電話の相手と話し込み、私にスマホを渡してただ喋るように促した。彼は「イザベルがなぜ外出しているのか」、「誰と一緒にいるのか」を尋ね、他の男性と一緒にないことを確認するために、テレビ電話にしてまで確認した。私が彼は誰なのかと聞くと、イザベルはそっけなく「私のボーイフレンド」と返答した。私は、この日の待ち人は、この時に電話で会話をした嫉妬深い男性だろうと考え、緊張しながら待った。しかし、彼は「ジョン」と名乗り、私は電話で話した彼と名前が違うことに気づいた。イザベルと同年代の彼は、「自分について何か聞いているか」と私に尋ねた。イザベルの目が何かを訴えているように感じたので、私は「あなたがかっこよくて、大好きだという話を聞いていたよ」と返答した。ジョンは安心したようにイザベルを見てから、私に微笑んだ。私は、「どのくらい付き合っているの」と当たり障りのないことを尋ねてみた。彼は「4年間くらいだ」と答えた。イザベルの婚姻期間と被っていることから子どもの父親は誰なのだろうと懐疑心を抱きつつ、2人と別れた（2017年11月18日）。

イザベルは後に、ジョンとは4年前に教会で出会い、大学で再会後、付き合いようになったと説明した。ジョンは、イザベルに子どもがいることを知っているという。イザベルは、私に電話をかけてきた年上の男性と、同年代の男性ジョンの両方とも「ボーイフレンド」と紹介した。しかし、後述するようにジョンとは「結婚」の話題が出ることもある一方で、年上の男性、すなわち「シュガー・ダディ」との婚姻は考えておらず、彼女にとっては先の言葉にあるようにサバイバル・セックスをする間柄のようであった。実際に以下の事例に示すように、イザベルは、金品の獲得を目的に会う男性ナナ・エディに対し、彼女自身が主導権を握っているように振舞っている。

月に一度の近親者や親しい人を呼ぶことができる日の午後、大学構内には多くの車と人が訪れていた。イザベルは、屋外でスマホをいじりながら私を待っていた。大学のTシャツにパンツというラフな格好の彼女は、待ち人を一人で待つのが寂しくなって私に連絡したと説明した。

しばらくして一台の高級車が学内に入ってきた。その車は近くに止まり、フライドチキンとビニール袋を持ち、ラフな格好で高級そうな革靴を履いた年配の男性が二人連れ立って出てきた。クマシでは、多くの人びとが共

通語としてチュイ語を話す、彼らは私に英語で挨拶をし、握手を求めた³。年配の男性はナナ・エディと呼ばれ、40代の中年男性であり、学校教員をしているという。待ち人であるナナ・エディが来たのに、イザベルは私の後ろでむくれていた。ガーナでは、年上に対して挨拶しない行為は失礼にあたるが、イザベルはナナ・エディに挨拶をしなかった。ナナ・エディは、私に「イザベルに私と話すように言ってくれ」と数回懇願した。彼は、怒っている彼女を目の前におろおろとする男性であった。

ナナ・エディはイザベルに謝り、ひたすら彼女の機嫌が直るのを待っていた。しばらくしてイザベルは、やれやれといった雰囲気、ナナ・エディを許し、彼の名前を呼んでハグをした。そしてナナ・エディからの贈り物を当たり前のように受け取り、机に置いて彼に寄りかかった。この日はすぐに別れたが、私はこの出来事、嫉妬深い電話をかけてきた男性が、ナナ・エディであったことを理解した。

ナナ・エディの車を見送ると、彼女は嬉々とした表情で「何をくれたのかしら」とビニール袋の中身を出した。彼女は封筒に入ったお金を数え、「100セディもくれたわ」と浮きだした声で叫んだ⁴。一緒に入っていた鎮痛薬パラセタモールには、何の興味もないようであった——思い起こせば、彼女は「頭痛い」と言っていた。イザベルとフライドチキンを食べながら、私が「なぜナナ・エディと会うのか」と聞くと、彼女は「私には子どもたちがいるでしょ、お金が必要だからよ」と言って「それに彼かっこいいでしょ」と笑顔で同意を求めてきたが、目が笑っておらず、私は同意するしかなかった(2017年11月19日)。

南アフリカの大学生たちを事例に、シェファーらは、文書の印刷費や学費、友人間での社会的ステータスのために年配男性であるシュガー・ダディと性的関係をもつ女子学生たちを報告している (Shefer et al., 2012)。イザベルは、ナナ・エディにもらった現金の使い道を語らなかったが、大学ではセメスターの学費支払い期間はすでに終了し、校内・寮ではあらゆるサービスが学生に提供されていた。毎月送金される元夫からの養育費(約1500セディ)は、実家の母親に手渡していた。観察した限り、彼女の金銭の使い道はもっぱら美容院代であった。しかし、彼女は「子どもたち」という言葉を使い、ナナ・エディと交際することを合理化した。

私はガーナを出国する前日、イザベルと滞在先の部屋でお別れ会をした。以前会ったとき、彼女には同世代の彼氏から元夫の話を知りたいという連絡がきていた。「そういえば、あの後は大丈夫だったの」と聞くと、彼女はまだ結婚はしないという方向で話を終わらせたと話した。イザベルは、「お互いまだ学生だから」と言い、唐突に彼の母親の話を始め、彼女と彼の結婚が困難な理由の一つとして民族の違いを説明した。イザベルは母系制の民族出身の一人っ子であり、彼は父系制の民族出身の一人っ子であった。自身の母親には、最初の結婚がうまくいかなかった娘が幸せになりそうな相手なら、誰でも良いと言われたという。そして元夫との話を詳しく話し始めた。

「イギリスでの生活に慣れ始めた頃、彼には他にも妻がいることに気づいたの」と、イザベルは悲壮感たっぷりに話を切り出した。私は、彼女から別れた夫の裏切りについて詳細な話を聞くにつれ、彼女の元夫に対する怒りを隠せなくなっていった。それに応じるようにイザベルは、騙されたことにどれほど傷ついたか、父親を失った子どもがかわいそうだと涙ながらに訴えた。私は、彼女に「泣かないで」と声をかけた。するとイザベルは涙をぬぐい、「もう忘れたわ。私は韓国人と結婚したいの」といってウインクした。私はあれほど結婚したいと思っていたジョンでもなく、唐突に出てきた韓国人の話に面食らってしまった。その理由を尋ねると、「韓国映画を見てから、ずっと結婚するなら韓国人だと決めている、だって優しくてイケメンだから」という返答であった(2017年11月26日)。

シュガー・ダディであるナナ・エディに対して冷めた対応をするイザベルは、同年代の彼氏ジョンとの結婚は真剣に考えている素ぶり、元夫による裏切りも引きずっている様子を見せていた。しかし、イザベルは唐突に韓国人との結婚に対する憧れを語り、大学が冬季休暇に入る頃には、新たなシュガー・ダディを探すために胸を強調した自身の写真をSNSに投稿していた。TSは恋人となりうる男性を探す中で偶発的に生じるとする先行研究に従えば、これらすべての男性はみな結婚に至る可能性がある恋人候補となるが、彼女は最初から目的を違えて付きあっ

ているようにみえる。

4.2. ウェイトレスのヴィクトリアの事例

ヴィクトリアは、クマシのパブ&レストランでアルバイトをしている。彼女はアカン出身の母親とエウェ出身の父親の元に生まれ、高校卒業まで首都アクラで育ち、その後母親の再婚先のクマシへと移住、現在は弟と共に部屋を借りて暮らしている。私は彼と先に知り合い、姉の彼氏がシュガー・ダディだということで、紹介を受けた。ヴィクトリアとダダポート（42歳）は、彼女が働くパブ&レストランで店員と客という立場で出会い、交際を始めたばかりであった。ダダポートは、赤い日産車で彼女を職場に迎えに行き、家まで送り届けてから自宅に帰るということを繰り返していた。彼は、職場では外国人との付き合いもある重要な役職についているという。

ある日、ヴィクトリアとダダポートと一緒にレストランに行く約束をした。ダダポートからの連絡を待つ間、恋愛ドラマを見ていると、突然彼女が「ダダポートは私のことを愛していないと思う」とつぶやいた。「なぜそう思うのか」と尋ねると、彼女は「私はいつも電話をかけているのに、彼はかけてくれない」とつまらなさそうに言って髪をセットしはじめた。続けて「彼からの愛がみえない。何にもみえない」とうつむきながら言う。私が「彼は結婚しているの」と確認すると、「うん、彼は結婚している。だからよ、だから電話さえくれない」と答え、彼に妻と二人の子どもがいることを説明した。ヴィクトリアは「私、別れようと思う」と語った。「今日伝えるの」と聞くと、彼女は「うん、そうする」と言いながら、私の手をぎゅっと握りしめた。

ダダポートと合流し、彼の車と一緒に乗り込むと、後部座席に座っている私の目の前で話し合いが始まった。彼女は半泣き状態でダダポートは黙り込み、音楽が消えた車内での信号待ちは鬱屈した空間だった。ダダポートは、車から出ると私に「ヴィクトリアと話をしてくれ」と助けを求めてきた。レストランに着いて料理を注文してからも、ヴィクトリアは機嫌を損ねていた。ダダポートは「俺は電話をかけたじゃないか」というフレーズを繰り返し、ヴィクトリアは一度納得した素ぶりをみせて炭酸ドリンクを飲み始めた。すると、ヴィクトリアはダダポートのスマホでメールチェックを始めた。ダダポートが料理の確認のために席を立つと、ヴィクトリアは、彼のスマホを操作して、「これが彼の奥さん、これが彼の子どもたち」と私に写真を見せてきた。すぐにダダポートが戻ってきたので、ヴィクトリアは慌ててスマホを机に置いた。ダダポートは、少し嫌そうな顔でスマホを彼側に引き寄せた。チュイ語を聞き逃したが、ダダポートとヴィクトリアが一言、二言話すと、突然二人は熱々の状態になった。ヴィクトリアはダダポートに寄りかかり、二人は笑い合い、先ほどまでの喧嘩が嘘のようだった。ダダポートはヴィクトリアに、「別れないよ」と軽い調子で伝えた。

帰りの車内では、何事もなかったようにラジオが流れていた。ヴィクトリアは途中で「インスタント焼きそばを買いたい」と車を離れた。その隙に、私がダダポートに彼女の何をどう思っているのかを聞くと、「私には一人の女性（妻）がいる」と淡々と返答された。ダダポートは、続けて「ヴィクトリアは美しくはないよ」と苦笑いしながら発言した（2017年11月3日）。

ダダポートに愛情を求めるヴィクトリアの姿は、当初「不倫」に苦しむ女性にみえた。しかし、ヴィクトリアは結婚自体を求めておらず、「自分を気にかけてくれる人と付き合いたい」と話す。彼らと頻繁に出かけるようになった頃、彼女から「彼とは一度しかセックスをしたことがないけど、気にしてない」と告白された。そして、「そういう流れになったら、断ることはできないだろう」と話した。彼女の真意は不明だが、2人の関係を観察すると、性行為が交際の必須条件として含まれているわけではないのではないか、という疑問を抱く。それは、性行為の見返りとしての内実に対する疑問とも重なる。

ヴィクトリアは、一つ100セディはくだらない高価な靴や靴、アクセサリを数多く所有しており、私は、これらはダダポートから贈られたものと予想していた。ゼンベらは、パトロンとなる裕福な男性が若い女性に贈るものは、女性本人の希望だけでなく、連れ添いの女性が美しいほうが良いと考える年配男性の希望にも合致した装飾品であると指摘した（Zembe et al., 2013）。ヴィクトリアは「月に200セディくらいしか給料をもらっていない」と語っていたが、これは彼女の出勤日数を計算すると妥当である⁵。しかし、彼女はこれらの装飾品は「自分で買った」と語

る。ダダポートから贈られている品物は、生活基盤に関わるものであった。彼女は、「彼に新しい布団を買ってもらったから、前の布団はお母さんにあげた」と説明したり、「彼が私のために買ってくれた」と冷蔵庫を指したりした。

以下では、2章で整理した先行研究の議論に照らして、彼女たちの交際関係について明らかになったことを考察する。

5. 現象としてのシュガー・ダディとの交際関係

5.1. 考察

冒頭で述べたように、性感染症予防等の問題意識をもつ従来の研究では、シュガー・ダディは財政的な豊かさ／特定の便宜を提供できる地位や権力を使って、女性から「性行為」を引き出そうとする男性であると認識されてきた。また、TSは、一方の極には文化的に認められた金品を伴う婚姻に至る恋愛があり、他方の極ではその場限りの実利的な性行為と金品との交換があるという連続体に位置するとし、女性たちはこの両極のあいだで偶発的に関係を取り結ぶと論じられてきた。さらに、女性の動機と社会経済の変容とを関連づけた議論では、一方の極に女性の貧困を、他方の極に近代化・グローバル化に伴う消費行為の変容を配置し、その間で特定のアフリカ諸国の若年女性像を析出しようとしてきた。

しかし、実際の交際関係の内実をみると、これらの枠組みから零れ落ちていくものが数多くある。イザベルは、ナナ・エディについて外見的な好みを除き、金品目的の関心しかないことを隠さなかった。彼女は、ナナ・エディとの交際動機を「子どものため」と語ったが、動機と実際の金銭の使い道は一致していなかった。他方で、彼女は元夫に裏切られた過去を涙ながらに語り、同年代の恋人との結婚が上手く運ばないことに思い悩み、韓国映画に登場するような男性とのロマンチックな結婚に憧れ、そしてSNSで性的な魅力をアピールしながら新たなシュガー・ダディ候補を募る。このような彼女とナナ・エディとの関係を、婚姻に至る恋愛と一時的な性的関係を両極に配置する線上のどこかに位置づけるものと捉え、彼女をその両極のいずれか／両方を重視しながらシュガー・ダディとの交際を模索する人物像として理解するのは容易ではない。むしろナナ・エディを「シュガー・ダディ」にしているのが、婚姻に至る恋愛に対する期待／実利的な関心という彼女の動機ではなく、元夫や同年代の恋人、理想の結婚相手、SNSの不特定多数のシュガー・ダディ候補など、その他の多くの男性との現行／潜在的な関係性ではないだろう。

また、ヴィクトリアは、ダダポートが頻繁に連絡しないことに不満や寂しさを表明し、時として彼女自身に対する彼の思いを試すような行為をしながら、ある種の愛情を求めていた。ヴィクトリアもイザベルと同様、貧困（サバイバル）のためにシュガー・ダディと交際する女性にも、近代的な女性としての消費欲求やステータスの獲得を目的にシュガー・ダディと交際する女性のいずれにも合致していないように見える。彼女は、低賃金労働者であり、生活基盤に関わる金品を贈与されているという意味では、サバイバルのためにダダポートと交際しているともいえるが、高価な装飾品は自身で購入している。

マラウイ農村部で若者たちの婚前関係について調査したポウリンは、交際関係には常に贈り物が存在することを指摘している（Poulin, 2007）。その場合、贈られる金品の多寡よりも、種類やタイミングに意味があることも、贈られるものに返礼が伴わないこともありうる（Poulin, 2007: 2388-2389）。都市部ガーナの異性間の交遊関係にも、多くの場合、贈り物が伴う。そのため、第2章で整理した先行研究も指摘するように、性行為の見返りに男性から金品を贈られていること自体が、即座に恋愛関係と実利的な関心に基づく関係を隔てる指標にはならないだろう。そうならば、彼女たちがひとつの交際関係をシュガー・ダディ関係とみなす際に重要なのは、性行為と金品が交換されているか否かではなく、どのような贈り物がどのような形で交換されているか／いないかについてのよりミクロな実践である。すなわち、そうした贈与交換のあり方が変化すれば、交際関係の定義や内実も変化すると想定される。

以上を踏まえると、同交際関係は先行研究が指摘するほど明確に動機や背景によって定義できるものではない。シュガー・ダディとの交際関係を理解するためには、同交際関係だけを取り出し、売春や恋愛、結婚の連続線上のどこに位置づけるか、それは西欧のそれと異なるといった視座で検討するのではなく、彼女たちが実際に／潜在的に持つその他の社会関係のなかで、同交際関係はどのような意味をもつか、そしてそれぞれの関係における

性行為、金銭、モノ、愛情や欲望、身体や生命の贈与交換をめぐる価値や意味にどのような違いがあるのかを見出していく視座が必要となるだろう。

5.2. おわりに——性行為とモノの交換をめぐる人類学

女性の動機と文化的慣行あるいは近代化・グローバル化の影響を重ね合わせる議論は、結局のところ、「しかじかの属性・状況にある者は、しかじかの行動をしがちである」といった人間理解から逃れられない。だが、本稿の事例が示すとおり、彼女たちが語る動機と彼女たちの実際の交際関係は必ずしも一致しない。

2章の4節でも触れたとおり、西欧とアフリカには異なる「価値システムの全体」があるとする「多元主義」にもとづく対比は、情報やひと、モノが流動的に動く現代で不可能なだけでなく、存在論的転回以降の人類学が批判する点でもある。例えば、マリリン・ストラザーンは、メラネシア人の実践と近代科学の実践とを並列的に継ぎ接ぎし、両者の予想していなかった類比を導き出すという手法を用いて、自他の社会を俯瞰的にまなざす人類学の視座の乗り越えを提起する (Strathern, 1988; ストラザーン, 2015; cf. 深川, 2018)。ストラザーンは、比較人類学の考察を大胆に試みたポスト多元主義を代表する人類学者であり、メラネシアにおける性差や人工物を通じた研究において、西欧と非西欧、近代と前近代の区分に基づく世界ではなく、それぞれが部分的に接続する世界をメラネシア人の視座から描き出した。

ストラザーンが、贈与の概念を用いて、メラネシア社会の財の交換事例とアメリカの胚をめぐる事例とを比較したように、シュガー・ダディとの交際関係を複雑な贈与・交換システムとして捉えたと、「西欧の売春や結婚といかにより異なるか」ではなく、その時々非物質的なものを含む個別の贈与・交換に私たち自身のそれとの類比と相違が潜んでいるように思われる。

このようにシュガー・ダディとの交際関係から、異なる社会の異なる文脈の実践にあるかもしれない類似した倫理や論理を見出し、そこから同交際関係の意義や問題、女性たちの脆弱性や可能性を問いなおすことが、非アフリカ人女性である筆者の今後の課題である。

注

- 1 ダイナンは、シュガー・ダディと呼ばれるパトロン男性との交際をキャリア戦略に不可欠なものとして位置付けるガーナのエリート女性たちを紹介している (Dinan, 1983)。
- 2 本稿では議論しないが、アフリカ諸国では年上女性がパトロン (「シュガー・マミー」) となり支援する交際関係 (Kuate-Defo, 2014) もある。こうした交際関係をおこなう人物は様々に呼ばれており、本稿では、文献上最も普及しており、性別に依拠しない呼び名として、「シュガー・ダディ」や「シュガー・マミー」と交際する若者を「シュガー・ベイビー」と称した (Kuate-Defo, 2014: 13-16)。
- 3 ガーナの公用語は英語であり、教育機関や銀行などのビジネスの場では英語使用が必須である。ガーナは約 80 以上の民族集団から構成される多民族国家であり、多数の言語が存在している。チュイ語 (アカン語) は、そのなかでも多くのガーナ人が話す共通語であり、本稿調査地域の半数以上を占めるアカン系民族の言語である。
- 4 2018年2月の調査時は、1米ドルが最大約 4.4 ガーナセディで両替可能であった。
- 5 BBCの報道によると、ガーナ国内の最低賃金を決定する全国三者委員会 (National Tripartite Committee) は、2018年の1日あたりの最低賃金を 9.68 セディに設定している (<https://www.bbc.com/pidgin/tori-44984512/>) (2018年9月5日閲覧)。

参考文献

- Amo-Adjei, J., Kumi-Kyereme, A., & Anmaale Tuoyire, D. (2014) "Transactional Sex among Female University Students in Ghana: Implications for HIV education," *Health Education* 114 (6): 473-486.
- Ankomah, A. (1998) "Condom Use in Sexual Exchange Relationships among Young Single Adults in Ghana," *AIDS Education and Prevention* 10 (4): 303-316.
- Clark, G. (1994) *Onions are My Husband: Survival and Accumulation by West African Market Women*, Chicago, University of Chicago Press.
- Dinan, C. (1983) "Sugar Daddies and Gold Diggers: The White-Collar Single Women in Accra," in Opong, C. (ed.), *Female and Male*

- in West Africa*, pp. 344-366, London, George Allen & Unwin.
- 深川宏樹 (2018) 「1章 人格と社会性」『21世紀の文化人類学——世界の新しい捉え方』前川啓治・箭内 匡・深川宏樹・浜田明範・里見龍樹・木村周平・根元達・三浦敦 (著), pp. 53-93, 新曜社.
- GSS (Ghana Statistical Service) (2013a) *The 2010 Population and Housing Census: National Analytical Report*, Accra, Ghana Statistical Service.
- GSS (Ghana Statistical Service) (2013b) *The 2010 Population and Housing Census: Regional Analytical Report*, Ashanti Region, Ghana Statistical Service.
- GSS (Ghana Statistical Service) (2014) *The 2010 Population and Housing Census: District Analytical Report*, Kumasi Metropolitan, Ghana Statistical Service.
- 浜田明範 (2018) 「2章 アクターネットワーク理論以降の人類学」『21世紀の文化人類学——世界の新しい捉え方』前川啓治・箭内 匡・深川宏樹・浜田明範・里見龍樹・木村周平・根元達・三浦敦 (著), pp. 99-132, 新曜社.
- Hunter, M. (2002) "The Materiality of Everyday Sex: Thinking beyond 'Prostitution,'" *African Studies* 61 (1): 99-120.
- Kuate-Defo, B. (2004) "Young People's Relationships with Sugar Daddies and Sugar Mummies: What Do We Know and What Do We Need to Know?," *African Journal of Reproductive Health* 8 (2): 13-37.
- Luke, N. (2005) "Confronting the 'Sugar Daddy' Stereotype: Age and Economic Asymmetries and Risky Sexual Behavior in Urban Kenya," *International Family Planning Perspectives* 31 (1): 6-14.
- Maganja, R. K., Maman, S., Groves, A., & Mbwambo, J. K. (2007) "Skinning the Goat and Pulling the Load: Transactional Sex among Youth in Dar es Salaam, Tanzania," *AIDS Care* 19 (8): 974-981.
- 織田雪世 (2011) 『髪を装う女性たち——ガーナ都市部におけるジェンダーと女性の経済活動』松香堂書店.
- Poulin, M. (2007) "Sex, Money, and Premarital Partnerships in Southern Malawi," *Social science & medicine* 65 (11): 2383-2393.
- Shefer, T., Clowes, L., & Vergnani, T. (2012) "Narratives of Transactional Sex on a University Campus," *Culture, Health & Sexuality* 14 (4): 435-447.
- ストラザーン, マリリン (2015) 『部分的つながり』大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽充・里見龍樹訳, 水声社.
- Strathern, M. (1988) *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*, Berkeley, and University of California Press.
- Wamoyi, J., Frenwick, A., Urassa, M., Zaba, B., & Stones, W. (2011) "Women's Bodies are Shops: Beliefs about Transactional Sex and Implications for Understanding Gender Power and HIV Prevention in Tanzania," *Archives Sexual Behavior* 40 (1): 5-15.
- Zembe, Y. Z., Townsend, L., Thorson, A., & Ekström, A. M. (2013) "Money talks, bullshit walks' Interrogating Notions of Consumption and Survival sex among Young Women Engaging in Transactional sex in Post-apartheid South Africa: A Qualitative Enquiry," *Globalization and Health* 9 (1): 1-28.

Relationships with “Sugar daddies” in Urban Ghana: Reconsideration of Perspectives over Motivations

KODA Eri

Abstract:

Previous studies on the relationship between the male patrons called “sugar daddies” and young women in Sub-Saharan Africa have been accumulated in the field of health and medical science focusing on the problems of reproductive health and rights. They mainly pay attention to women’s motivations by capturing these relationships in the framework of West versus Africa, and discuss it as survival sex or consumption sex. The purpose of this paper is to explore anthropological research on these relationships with “sugar daddies”. Based on the cases of women’s relationships in urban Ghana, this paper criticizes the analytical framework of previous studies and argues the possibility of cultural anthropology with the analogical methodology by Marilyn Strathern. I argue that the study questions on the relationships with “sugar daddies” should be shifted from “Why they have these relationships?” to “How they build these relationships?”, in order to understand these relationships as complex systems of the gift and exchange.

Keywords: Ghana, sugar daddies, women, the City, the Gift

ガーナ都市部における「シュガー・ダディ」との交際関係 ——動機をめぐる視座の再考——

小 田 英 里

要旨：

サハラ以南アフリカ諸国では、「シュガー・ダディ」と呼ばれるパトロン男性と若年女性との交際関係について、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの問題に関心をもつ保健医療分野を中心に研究が興隆してきた。先行研究は、同交際関係を西欧対アフリカの枠組みで捉え、その大半が女性の交際動機に注目し、貧困を生き抜くための性行為あるいは現代的な消費欲求を満たすための性行為として論じている。本稿の目的は、「シュガー・ダディ」との交際関係について、人類学的研究を展開させる糸口を探り当てることである。ガーナ都市部の女性の交際事例から先行研究の分析枠組みを批判し、マリリン・ストラザーンによる比較の方法論を中心に人類学の可能性を明らかにした。また、「シュガー・ダディ」との交際関係について、「なぜ交際するのか」から「どのように交際しているのか」へと問いを変化させ、この関係を複雑な贈与・交換システムとして捉える必要性を主張する。

